

エヴェンキ族の祀る神の種類と偶像について

汪立珍※

はじめに

エヴェンキ族は、主として中国の内モンゴル自治区呼倫貝爾盟に分布している。1992年に行われた中国の人口調査によると、全国のエヴェンキ族の人口は26,315人となっている。エヴェンキ族の“エヴェンキ”という言葉は、この民族の自称であり、“山から降りた人”、或いは“山から下りてきた人達”という意味である。歴史上、エヴェンキ族は、主に狩猟を営んでいたもので、現在、分布地域によって、それぞれ狩猟、牧畜と農耕を生業としている。

エヴェンキ族の信仰、祭祀儀礼、民間の習慣を見れば、エヴェンキ族は昔からシャーマニズムを信仰していることが明らかになる。皆さんもご存じのように、シャーマニズムの形成は割合に複雑な社会現象であるが、その主な特徴は伝統的な狩猟生産に関わるものである。エヴェンキ族にシャーマニズムが生じた総合的な社会背景と信仰内容を分析してみると、シャーマニズム信仰は多神崇拝の形式で、だいたい三つの段階を経たものである。①自然崇拜、②トーテム崇拜、③祖先崇拜である。エヴェンキ族のシャーマニズム民間信仰の基礎は“万物有霊論”である。エヴェンキ族はそれぞれの祭りをを行い、祭を通じて大自然、トーテムのしるしとなる品物及び祖先の神に自分の希望、願いを祈るのである。

エヴェンキ族に関する歴史文献資料と現在でもエヴェンキ族の民間で行われている祭祀活動をざっと見渡せば、エヴェンキ族の祭祀活動は大抵二種類あることが分かる。一つ目は、定まった時間、場所、儀式なしに、いつでもどこ

でも行うことができる祭祀である。二つ目は、時間、場所、儀式などが定められている祭祀である。明らかに、二つ目の祭祀は、仏教などの外来宗教の影響を受けている。エヴェンキ族は、いつでもどこでも大自然の山の神、火の神などの自然神霊を祀る一方、同時に家の中でも様々な人物の偶像を祀る。

文化大革命の間、人物神を祀る民間活動が禁じられ、大部分の神霊偶像が政府に没収され、灰と化した。それらの偶像のうちの一部分は民間人によって隠され、80年代に至ってようやく祭祀が行われるようになった。しかし、十年間にわたる文化大革命の影響で、今では神霊を祀るエヴェンキの家庭は少なくなり、祀られる偶像も複製品であることが多いと思う。

私は、エヴェンキ族に関する歴史資料と現地調査資料に基づいて、エヴェンキ族の祭祀活動の機能を分析した結果、エヴェンキ族の祀る神は、おそらく氏族祖先神、動物保護神、病氣治療神などの三種類があるという結論を得た。

1. 氏族祖先神

エヴェンキ人は祖先を祀ることを大変重視する。氏族の祖先は経済、生産、人口の繁殖を保護しているから、祖先を忘れてはならないと考え、豊作の年や各種重大な活動を行うとき、先祖を祀らなければならないと思っている。しかし、居住地によって、氏族祖先の由来、祀る時間、供物および祖先の偶像も多様である。

オルグヤ（敖魯古雅）エヴェンキ人の祖先をかたどった偶像は二種類ある。一つは、白樺の木で蛇の形を彫刻したもので、もう一つは、白樺の木で刻んだ男と女である。平時に、この二

※中国・中央民族大学少数民族文学芸術研究所講師

種の偶像をノロ或いは鹿の皮で包んで置く。先祖を祀るときだけ取り出して家の東北にある台の上に置いて祀る。現地の民話によれば、エヴェンキ人が蛇を先祖として祀るのは、昔蛇がエヴェンキ人の病気を治したためである。したがって、狩猟をするエヴェンキ人は、狩猟中何か獲物を獲ったとき、或いは、家族の中で誰かが病気になったとき、必ず祖先神を祀る。祭祀は、火の中にトナカイの脂をいれて、その香りをあたりに漂わせる、と言う方法をとる。エヴェンキ人の祖先は油の香りを大変好み、その香りをかげば、エヴェンキ人の思いを知り、助けてくるとエヴェンキ人は信じているのである。

アロン旗（阿榮旗）チャバチ（查巴奇）エヴェンキ人のエヴェンキ人の祀る祖先をかたどった偶像は、青い布の上に太陽、月、九つの人形及び対称的に並べられた二本の竜という配置である。ここでは、青い布は青空を表している。太陽、月、九つの人形及び対置された竜は、白樺の皮や動物の皮或いは紙で作られている。毎年五月五日と八月十五日に、線香を点して、動物の肉やお菓子などの食物を祖先に捧げる。儀式が終わると、先祖の偶像は家族の中での最年長者に納められる。氏族の祖先神は雷に撃たれて亡くなった人の化身である。雷に撃たれて亡くなるのは神様の意志であり、撃たれた人は神様の恵みを受けることができ、雷に撃たれたこの人がエヴェンキ族にとっての神（祖先神）であると、エヴェンキ人は認識する。アロン族のエヴェンキ人は、祖先神を祀ると同時に部落シャーマンの祖先神も祀る。

ホーチンバルグ旗（陳巴爾虎旗）エヴェンキ人の祖先神を祀る偶像は三種類である。一種類目は、落葉松で彫刻した長さが3寸ぐらいの人の顔である。二種類目は、緑色の布で包んである薄い鉄片で切り取って作った女の姿である。三種類目は、青い布に三十一個の人の形を貼り付けたものである。その中では、左側の三つがシャーマンである。上のほうにある薄い鉄片でできた九つは女である。下のほうにある薄い銅

片でつくった九つは男である。

むかし、ホーチンバルグ旗エヴェンキ人の祖先神は、シャーマンが祀ることになっていた。しかし、エヴェンキ族の経済や文化の発展に伴い、普通の家庭も祖先神を祀るようになった。しかも娘が嫁ぐとき、娘のために親が新しい祖先神の偶像を作り、保護神として嫁ぎ先に持って行かせる。エヴェンキ人は祖先神の偶像を家の北方に置いて祀る。民話によると、ホーチンバルグエヴェンキ人の先祖はシャーマンの化身である。

エヴェンキ旗（鄂温克旗）ホイ（輝河）エヴェンキ人の祖先神の偶像は、アロン旗エヴェンキ人の祖先神の偶像と似ていて、青い布の上に太陽、月、九つの人形が貼り付けてある。しかし、構図と材料はアロン旗エヴェンキ人の祖先神の偶像と異なる。ホイエヴェンキ人の祖先神の偶像には、青い布の一番上に赤い布で作った太陽と白い布で作った月があり、真ん中には動物の皮で作った山があり、一番下には動物の皮で作った九つの人がある。新年を祝うとき、或いは病気になったときに、祖先神の偶像を家の北側にかけ、チーズ、羊の肉、お菓子などを供えて祀る。儀式が終わると年長の人祖先神の偶像を保管する。祖先神の由来はアロン旗エヴェンキ人と同じく、雷に撃たれて亡くなった人の化身であると思っている。

2. 動物保護神

狩猟、遊牧を生活基盤としているエヴェンキ人にとって、トナカイ、牛、羊などの動物は生活に欠かせないものである。動物はすべて神の恵みである。世の中の動物はすべて神のものであり、そしてそれらの動物を保護する神がいる。したがって、毎年多くの獲物をとれるように、そして、家畜が平安に成長できるように、エヴェンキ人はこの動物の保護神を祀らなければならないと思っている。

トナカイはオルグヤ（敖魯古雅）エヴェンキ人の経済と生活から切り離せないものである。

トナカイの保護神は二つあると信じられている。一つは神熊で、もう一つは木の枝で作った神である。神熊は、はくせいである。その小熊ははくせいをトナカイの牧場の付近に置く。熊は動物の王であり、熊の皮は熊の神霊であり、その神霊はエヴェンキ人のトナカイを外敵から保護してくれると、狩猟を生業とするエヴェンキ人は信じている。それゆえ、狩猟をするエヴェンキ人はトナカイの牧場に年中神熊を祀る。

木の枝で作ったトナカイの保護神は（エヴェンキ語で“アロン”と言い、落葉松或いは白樺の特殊な“又”字形の枝で作られたものである。この“又”字形の枝は森の中で大変稀少なものであるから、このような枝は山の神の象徴、トナカイの保護神であるに違いないと、考えられている。したがって、トナカイの発病期になると、エヴェンキ人はその枝をトナカイ群の中に最も年長でしかも最も健康なトナカイの首に掛ける。これによって、トナカイの群に病疫の蔓延を防ぐことができると考えている。トナカイの発病期がすぎると、“アロン”をトナカイの首から取り外し、撮羅子（天幕）の外にある木の棚の上に置いて保存する。

遊牧を生業としているエヴェンキ人は、牛、馬、羊などの家畜の保護神“ジャチ（吉雅奇）”を祀る。ジャチは長方形の白い布（或いは白いフェルト）に馬の鬣或いは馬の尾の毛（自家のものは使わない）で、編んだ男と女の人形を縫いつけたもので、顔の部分に墨で目、鼻、口などの五官を描いてある。毎年春と秋に、遊牧エヴェンキ人は“ジャチ”を祀る儀式を行う。春の祭祀活動では、家畜の繁殖や家畜に災難が発生しないことを祈る。秋は、一年中エヴェンキ人の家畜を保護し、エヴェンキ人に豊作を与えてくれた“ジャチ”神への感謝祭である。春秋以外にも、エヴェンキ人は“ジャチ”を祀ることがある。例えば、家畜を買って来たときに、家畜の鬣の数本を男女の“ジャチ”神の両方に置く。家畜をさばいた後には、肩の骨や腰の骨を“ジャチ”神の下に掛ける。乳牛の初めての牛乳

或いはその牛乳で炊いたお粥を“ジャチ”に供える。エヴェンキ人は年中“ジャチ”神を祀る。ジャチ神に家畜の状況を知らせて、家畜の保護を祈るためである。

“ジャチ”神に対する供物は、主に家畜の肉、乳製品と牛乳で炊いたお粥である。エヴェンキ人は“ジャチ”神を祀るとき、祖先神を“ジャチ”神と並べ、同時に祀る。

農業と狩猟を生業としているアロン旗のエヴェンキ人も“ジャチ”神を祀る。しかし、彼らは漢民族の影響を受け、豚の頭を供え品として、“ジャチ”神を祀る。祀る目的は、財産の獲得を願うためである。

3. 病氣治療神

エヴェンキ人は病氣について独特な考え方を持っている。子供が病氣を患うのは、子供の魂が驚かされたためである。女性が病氣に患うのは、祖先神に失礼なことをしたからである。このような原因で患った病氣は、病氣治療神を祈らなければ治らないと考えられている。エヴェンキ人の病氣治療神は、“ウマイ”神、“ニャンニャン”神と“ダウィ”神がある。

“ウマイ”神は、オルグヤエヴェンキ人の子供を守る神である。その形は白樺の木或いは落葉松の木で彫刻した二羽の小鳥である。普段は、これらは動物の皮で包んである。子供が病氣になった時に、家にシャーマンを招き、シャーマンが、“ウマイ”神に子供の魂の取り戻しに行くことを求める。儀式を行うために、“ウマイ”神に捧げる供え品として、必ず白と黒のトナカイを用意する。儀式は病氣になった子供の家で夜に行う。まず、シャーマンが別の世界を辿って子供の魂を取り戻すための乗り物として、黒いトナカイをさばく。そして、“ウマイ”神を家の中に置いてある台に供え、灯りを消し、シャーマンが家の中で鼓を敲きながら走り回り、子供の魂を追いかける。一頻りなると、シャーマンが踊りを止めて、灯りをつけ、鼓の上に子供の髪の毛が付いているかないかを皆に見せる。髪

の毛が付いていれば、子供の魂は取り戻されたのである。病人が男の子なら、父親はすぐに鼓の上にある髪の毛を取って、綺麗な布に包んで脇の下に挟む。病人が女の子なら、母親はそれを行う。儀式を終了すると、シャーマンが“ウマイ”を納める。次の日、子供の家族は、しろいトナカイをさばいて、シャーマンに礼を言う。ここに至って、儀式はすべて終わる。このような儀式は狩猟をするエヴェンキ人の民間信仰の中で最も重要な内容である。中国東北にいる満族、オロチョン族の間でも同じような祭祀儀式が行われている。

“ニャンニャン”神は、チャバチ郷エヴェンキ人の祀る、子供の天然痘と麻疹を専門的に治療する神である。“ニャンニャン”神の偶像は、白い布の上に動物の皮、或いは白樺の皮で三枚の女性の形を切り取って縫いつけたものである。真ん中のものはやや大きく、両側のものは少々小さくて、その女性の形の切りぬきの顔に、墨で耳、鼻、目、口が描かれている。子供が天然痘や麻疹を患ったときに、エヴェンキ人はすぐに肉、お菓子などの供え品を供えて、“ニャンニャン”神を祀る。“ニャンニャン”神を祀れば、子供の病気が治療されると、エヴェンキ人は確信している。“ニャンニャン”神を祀るときは、祖先神の下に掛ける。普通、毎年の五月五日と八月十五日に“ニャンニャン”神を祀る。

ホーチンバルグ旗エヴェンキ人の女性が病気になったとき、“ダヴィ”神を祀る。“ダヴィ”神の偶像は、青い布の上に二枚の女性の形の切りぬきを貼り付けたものである。この二枚の切りぬきは、白い布、或いは白いフェルトで剪り作ったものである。平日に、偶像を家の中の物掛けに掛ける。女性が病気になったときに、偶像を物掛けから取り外して、家の北側にある台の上に置いて、牛、羊の肋骨や乳製品、お菓子などを供える。そして、草原から採ってきたヨモギに火をつけ、その煙で“ダヴィ”女神を燻す。それによって、病気が治癒され、健康の体に回復できると、エヴェンキ人の女性が信じている。

以上に挙げた、エヴェンキ人が祀る三種類の神の他には、シャーマンの面具神などもある。シャーマンの面具（仮面）神もエヴェンキ人の主な保護神であり、遊牧のエヴェンキ人は殆どがこれを祀る。1994年、私はエヴェンキ旗伊敏索木（イミンソム）伊敏河東岸の蒙古包の中でそれを見たことがある。その面具神は、赤銅の薄い板で作られたもので、高さ約25cm、幅約20cmで、目と口の部分が空で、顔、鼻と額の部分が突き出ている。その面具神を家の真ん中に掛けて、上に赤い布を被せる。祀るときだけ、赤い布を取り外し、面具神の前に小さなテーブルを置き、そのテーブルの上に肉、乳製品と菓子などの物を供え品として供える。そして、面具神の口に羊の脂を喰わせる。

あとがき

以上に述べたように、エヴェンキ族の祭祀活動は、幸福の祈求、病気の治癒、安泰の保全等が主な目的になっている。エヴェンキ族の祭祀活動の内容を周りの他民族と比べてみれば、オルグヤエヴェンキ人とホーチンバルグエヴェンキ人の祭祀活動は、エヴェンキ族独特のものであると分かる。それと違って、エヴェンキ旗とアロン旗のエヴェンキ人の祭祀内容は、かなりの部分がオロチョン族、ダフル族の祭祀内容と類似している。

1998年8月1日のエヴェンキ族自治旗成立40年を祝うために、エヴェンキ族自治旗にエヴェンキ族博物館が建てられ、館内にエヴェンキ族の祀る神の偶像、及びシャーマンの服飾、白樺の皮で作った芸術品、トナカイに関する文化などの様々な実物が展示されている。

参考文献

- 1.『エヴェンキ族社会歴史調査』、1986年、内モンゴル人民出版社。
- 2.『エヴェンキ簡史』、1983年、同上。
- 3.『エヴェンキ民間の物語り』、王士媛編、1982年、上海文芸出版社。

- 4.『エヴェンキ歴史論集』,第三号,1998年,
ハイラル市古書センター。
- 5.『エヴェンキ民間美術研究』,鄂・蘇日台,
1997年,内モンゴル文化出版社。
- 6.『狩獵民族原始芸術』,鄂・蘇日台,1992年,

同上。

- 7.『北方少数民族シャーマン神話』,白杉,
1995年,ハイラル市古書センター。
- 8.『黒龍江民間の文学』,第6号,1983年,中
国民間文芸研究会。

新刊紹介

蕭 紅燕著

『中国四川農村の家族と婚姻』

長江上流域の文化人類学的研究と副題された本書は、著者の学位論文を基に刊本化されたものである。中国研究者自身による本格的なモノグラフ研究であり、調査地区は三峡ダムの建設で、大きな社会変動が予想されるだけに今後、学術方面だけでなく一級の記録資料としての価値をもつことにもなる。

構成は、序文(高橋統一)、はじめに、第1章 調査地の概要、第2章 村落の歴史的背景、第3章 宗族、第4章 婚姻連帯と社会結合、第5章 村落統合と権力構造 むすび、となっており、参考文献・索引・英文要旨も添えられ、巻末のフィールド写真により、調査地とともに調査光景が彷彿とさせられる。本文中に多用される図表にも工夫が見られ、定式化した報告の中にも読者とフィールド体験を共有しようとの意欲に満ちた丁寧な本づくりとなっている。

著者の研究手法・視角については本誌の12.14号にも投稿されているので詳細は省くが、漢族の家族と婚姻というオーソドックスな主題に対

し、聞き取りはもとより、族譜・保甲編査冊・経單簿・墓碑などあたうる限りの文字資料をも活用し、民国期・解放後・生産責任制(1979)以降と時代ごとの変化に眼を注ぎ(時系列)、さらに、日本の村落社会を思い浮かべながら調査した(比較研究)というように貪欲ともいえる関心で立ち向かう姿勢にある。こうして調査村落の移住伝説と複姓村の成立関係、宗族の連続性と変容など、家族・親族の特性が提示された後、本書の大半を占める婚姻の問題が、通婚圏、婚姻観、離婚と再婚、早婚の背景など具体的に論じられる。著者は日本の志摩地方のフィールド調査を体験する中で、「他文化について理解しようとするわたしが実は自文化について無知であること」を痛感し、中国の民衆、老百姓の世界の研究を志したという。高知大学で「郷にいれば郷に従え」を実践する氏に、比較研究方面の成果を次には期待したい。

(佐野賢治)

A5判 437頁 慶友社 2000年2月刊